

論説

両大戦間期におけるカオダイ教と 日本との関わり（上）

——『復国時期 1941-1946 におけるカオダイ教の
歴史』を中心として——

高 津 茂

はじめに

カオダイ教の宗教法人としての認可は 1926 年 12 月に遡るが、専ら 1930 年代前半に集中して分裂をした¹⁾。筆者はその分裂の一つの要因が、扶島の統制とフランス植民地主義への抵抗の仕方にあると考えている²⁾。また筆者は既に 1934-1941 年のカオダイ教の日本への期待についてはその特質をまとめており³⁾、本小稿ではそれに引き続く 1942-1945 年の時期のタイニン聖座派が日本とどのように関わって行ったのか、またその意図はどのようなものであったのかについて実証し、併せてその 4 年間のカオダイ軍創設の経緯を明らかにすることにある。タイニン聖座派以外のカオダイ教支派にも正式な軍事組織ではないが、戦闘をになった経緯はある⁴⁾。ただ本小稿が対象とするカオダイ軍は、具体的にはタイニン派が創設した「内応義兵（Nội Ứng Nghĩa Binh）や「近衛軍（Cận Vệ Quân）」を指すものとし、この時期のタイニン派の代表教師チャン・クワン・ヴィン（Trần Quang Vinh）を中心に考察することとする。

これまでこの時期の日本とヴェトナムとの関係を考察した論考は少なからずある⁵⁾ものの、カオダイ教と日本との関係を専論した論考はいくつかのカオダイ教研究⁶⁾以外にはなかったが、『チャン・クワン・ヴィン回

想録』⁷⁾の中で、チャン・クワン・ヴィン自身が、「カオダイ教の諸信友 (tín hữu) の 1941-1946 の革命的時期についての詳細を明らかに知りたい諸読者は、カオダイ教代表教師⁸⁾の秘書長であったグエン・タイン・ザイン (Nguyễn Thanh Danh) による『復国時期 1941-1946 におけるカオダイ教の歴史』(Lịch Sử Đạo Cao Đài trong thời kỳ phục quốc, 1941-1946)【以下 LSDCD と略記する】をご紹介申し上げる。1972 年 3 月 29 日チャン・クワン・ヴィン (道号 ヒエン・チュン (HIỂN TRUNG))⁹⁾と述べていることから、『復国時期 1941-1946 におけるカオダイ教の歴史』の「Ⅰ. 護法¹⁰⁾ (Đức Hộ Pháp) が難に遭われた後の教えの状況, Ⅱ. 日本と協力して事業を行う時期」に記されたタイニン派カオダイ教の側からの史料に依拠しつつ、また同書の補足 (Phan Ⅱ Bổ Túc Hồi Ký Phôi Sư Thượng Vinh Thanh, Trần Quang Vinh 1897-1975) に記され、拙稿末に添えた一覧表で示した上述の時期に行われた 19 回の扶鸞 (phò loan) を参照しながら、論述することとしたい。なお、降された扶鸞 (phò loan) の記事内容は、紙幅の関係で逐一の紹介は控えた。

1. 畿外侯クワン・デ (Đức Kỳ Ngoại Hầu Cường Đế) とチャン・クワン・ヴィン

チャン・ミィ・ヴァンによると、1939 年 3 月 12 日に日本軍に附属されるように越南復国同盟会 (Việt Nam Phục Quốc Đồng Minh Hội) が創設され、その組織メンバーが決められ、クワン・デが日本に戻った後、組織の円滑な運用を図るために、それぞれの役割に応じてその責任を委任し、「ヴェトナム国内においては、チャン・クワン・ヴィンとチャン・ヴァン・アン (Trần Văn Ân) が南部で、中部ではゴォ・ディン・ズィエム (Ngô Đình Diệm) とファン・トゥック・ゴォ (Phan Thuc Ngo) が、(中略) 働くよう選ばれた。」¹¹⁾とある。1939 年段階で護法ファ

ム・コン・タック (Phạm Công Tắc) ではなくカオダイ教の中ではザオ・スウ (教師 Giáo Sư) の地位にあったチャン・クワン・ヴィンが越南復国同盟会の南部における活動責任者に選ばれたことに注目しておきたい。ただし、白石昌也によれば、「クオン・デの頭の中では、ベトナム復国同盟会は、休眠状態にあるベトナム光復会を継承する団体です。そのために、光復会の主要な活動家であった人たちを、仲間に引きこむことが必要でした。しかし、実際には、彼らが復国同盟会に関与した形跡はありません。』¹²⁾ としていることからすると、チャン・クワン・ヴィンは光復会の主要な活動家であったことが推測される。ただ、彼の履歴¹³⁾を見る限りそれをうかがわせるものはない。

2. 護法 (Đức Hộ Pháp) が逮捕・流刑後のカオダイ教 タイニン派の状況

(1) タイニン聖座 (Tòa Thánh Tây Ninh)¹⁴⁾ の状況

1940年の南圻蜂起とメコンデルタにおけるカオダイ教徒の反乱¹⁵⁾は、後江聖会に対する各浄室での活動停止¹⁶⁾にとどまらず、タイニン派にも及び1941年閏6月4日、護法ファム・コン・タック (Phạm Công Tắc) と5人の高僧は、突然逮捕され、マダガスカル島への流刑となった。残されたカオダイ教徒がおかれた状況を LSDCD から引用すると、「この知らせは全教えを震撼させ混乱に陥れ、職色 (Chức Sắc)¹⁷⁾と道友 (Đạo Hữu)¹⁸⁾はごたごたとして騒然としており、牢獄に入れられ苦悩している教主 (Giáo Chủ)¹⁹⁾を哀惜して動揺したり、教えがこれからどうなるのかが分からずに互いに非常に怖がって深く心配したりしていた。当時、聖座にあって仕事を受け持つ権能を持った職色は、一部には人に知られない所に疎開している方もおられ、一部には大胆にも犠牲を決意して、教えの財産と精神を守り保つことを考え、仕事を依然としてし続ける方も居られ

ました。』²⁰⁾との混乱振りを伝えている。混乱に続いて教えの指導権争いが描かれる。すなわち。「1941年閏6月16日、護法が不在の間、統一権を確立するために聖座における職色の集会があり、三人の正配師 (Chánh Phối Sư)²¹⁾に権能を委任することとした。この集会は、多数の職色が署名することで成立した。この中には協天台 (Hiệp Thiên Đài)²²⁾律事 (Luật Sư)²³⁾ファン・ヴァン・フウオク (Phan Văn Phước) とヴォ・ヴァン・ニョン (Võ Văn Nhơn) のお二人は統一権をお互いに得ようとして争う程に極めて反動的であり、九重台 (Cửu Trùng Đài)²⁴⁾職色の各位とお二人の律事との間で非常に白熱したために、多数派の意見はますます躊躇われることとなった。そのため、三人の正配師による統一権をという主張は、成立することが出なかった。

1941年閏7月11日、玉正配師 (Quyền Ngọc Chánh Phối Sư) ゴック・チョン・タイン (Ngọc Trọng Thanh), 教師 (Giáo Sư) タイ・ガム・タイン (Thái Gấm Thanh), 士載 (Sĩ Tải)²⁵⁾ドォ・クワン・ヒィエン (Đỗ Quang Hiên) が聖座で皆逮捕され、同時に教師タイ・ファン・タイン (Thái Phần Thanh) がキム・ビィエン (Kim Biên)²⁶⁾で逮捕され、開法 (Khai Pháp)²⁷⁾チャン・ズイ・ギィア (Trần Duy Nghĩa) もこの日にサイゴンで逮捕された。

当時、トゥオン・チュ・タイン (Thượng Chủ Thanh) が弁護士の下に心配して逃れたが、効果はなかった。日が経つ程に逮捕は増え、聖座にまだ残っている職色がどれほどであったか。同じ集会で意見を交換して結論を出し、九院 (Cửu Viện)²⁸⁾を整理して仕事をし続けて、聖座の周囲の教えのほとんど全ての財産の管理を行っている現職の和院 (Hòa Viện)²⁹⁾管理者の教師トゥオン・チィ・タイン (Thượng Trí Thanh) を信任した。』³⁰⁾

フランスの弾圧はさらにエスカレートし、タイニン聖座はフランス軍の兵営に召し上げられ、あろうことかタイニン聖座でキリスト教の布教が行

われるに至った。このような状況の中でカオダイ教支派の一つバン・チン・ダオ・ベン・チェから連帯の申し出があったが、それに応える者は一人としてなかった。すなわち、「1941年8月、タイニン省長と郡長ラム・ヴェン・フエ (Lâm Văn Huê) が、教師トゥオン・チィ・タインと交渉し、聖座をフランス兵の住む兵営として借用することを頼み、24時間の期限を切って別の場所に引っ越すよう要請した。婉曲に拒絶することができない関係のために、聖座とビン・ズゥオン・ダオ通り (đường Bình Dương Đạo) に沿った長い各建物は皆フランス兵が駐留する兵営となった。逗留する場所を探し求めて寺域の外に疎開した各職色は、教えの財産を管理した。一部の職色は、退いて身を隠した。

何の明白な理由もなく曖昧な方法で護法と天封の諸位 (chư vị Đại Thiên Phong)³¹⁾を逮捕したことで、多くの方々の心に不平不満が高じて熱くなっているように感じられた。この不満は耐えることのできないものであり、大切な教主を深い悲しみに堪えない状態に置いたとして、礼生 (Lễ Sinh) トゥオン・チィ・タイン (Thượng Tỷ Thanh), ゴック・ホアイ・タイン (Ngọc Hoai Thanh) と律事フゥォクとニョンの四位はやにわにフランス政府の態度に抗議する役を引き受けることを決めた。後日、護法と天封の諸位は理由もなしに静寂な方法で逮捕されたと律事フゥォクとニョンは全教えに公表した。一方ではインドシナにおける各フランス当局者に直接多くの手紙を書き送り、極めて激烈に抗議をしたため、多数が皆巻き添えになることを怖れた。この二位の律事は、1941年10月25日にサイゴンの秘密警察 (Sở Mật Thám) が二人を逮捕するまで間断なく活動し続けた。同時に教師トゥオン・チィ・タインもニョンとフゥォクと同じように1回逮捕された。

当時の聖座は、教師トゥオン・トゥォク・タイン (Thượng Tước Thanh) と教友 (Giáo Hữu) トゥオン・チャット・タイン (Thượng Chất Thanh) により、わずかの道友・職色に割り当てられて指揮されて

おり、他方では教えの財産は丁寧に保持されていた。またこの二位は毎月一度は聖座を訪問したが、あえて聖座に居ることはなかった。というのは、当時は極めて重大な困難の中にあったためで、フランス植民地政府は毎日聖座にキリスト教の牧師 (Linh Mục) を入れて道友を改宗させ、完全に脅迫していた。さらにバン・チン・ダオ・ベン・チュ (Ban Chinh Đạo Bến Tre) について、礼生トイ (Thói) がトゥオン (Tuơng) 氏が聖座に戻ることを請いにきた³²⁾。逮捕された天封の各位を救い、教えを保ち守っていくことに心を配り協同して事に当たるよう勧告しにレエ・テュ・ヴィン (Lê Thé Vinh) が戻ってきた時もあったが、閉じこもって誰も全く申し出に応えることはなかった。聖座にまだ残っている人数は、ただ誰にも惑わされることのない至尊 (Chí Tôn) に極めて孝行な子弟のみであったためである。]³³⁾

このような状況にも拘らずただ一人の高僧であったトゥオン・チュウ・タイン (Thượng Chủ Thanh) 師に、指導力はなかった。このトゥオン・チュウ・タイン氏を命がけでキム・ビエンにお連れしたのがチャン・クワン・ヴィンことトゥオン・ヴィン・タイン (Thượng Vinh Thanh) であったことが分かる。すなわち、「1941年11月24日、ハノイにおいて教友タイ・デン・タイン (Thái Đền Thanh) が、教えの極めて悲痛な状態を見て新たに僅の職色と議論し、聖座が没収された同じ日に各浄室 (Thánh Thất) も門を閉じている当時の各地の教えの情勢を見極めるために、氏は南圻において謀事を巡らせた。職色は教えを行う個人の家宅を探し求めねばならず、そのため各浄室は没収され、荒れ果てたまま放っておかれた。しかし、全道の精神はこれまでに動揺することなく、この点は後々の将来のために祝うに値することであった。

尚 (Thượng) 正配師の権能に与るトゥオン・チュウ・タイン (Thượng Chủ Thanh) についてだけ言えば、護法と大天封の諸位が逮捕された後、聖会 (Hội Thánh) でただお一人の高位に在られる方であった。しかし、この方は大変ビクビクなされ後輩の模範となる立ち居振る舞いの資格もな

く、反対に身を隠す場所をチョ・ロン³⁴⁾に探して退き、誰も全く会うことができなかった。ただ一人教師トゥオン・ドゥック・タイン (Thượng Đức Thanh) だけが集まりから氏の下に急ぎ退くのみであった。氏は聖座は解散せねばならないと教師トゥオクに諭し、それについて次のように教えた。すなわち、もしトゥオン氏 (ông Phủ Tương)³⁵⁾が聖座に戻るなら、その時は聖座はトゥオン氏に下されよう。トゥオン氏がどのようなつもりかははっきりしておらず、実際は難しいものと思う。1942年1月7日まで間断なく、教師トゥオン・ヴィン・タインが危険を犯して氏を自動車でキム・ビエンに連れ戻した。困難な時の経過の中で、全ての教えにある者が偉大な職色の困難な情勢を救って挽回する活動に期待をしている最中であったが、尚正配師の権能に与る氏は全ての教えにある者を助けるための何の意見も持たず、反対に氏は自分の保身に気を配るのみであった。』³⁶⁾

(2) キム・ビエン浄室における活動状況

「1942年3月下旬、キム・ビエン浄室において、大職色達が更にまたこの場所で皆で取り掛かった。すなわち、カオ・ティエップ・ダオ (Cao Tiệp Đạo), 尚正配師の権能に与るトゥオン・チュウ・タイン, 教師トゥオン・ヴィン・タイン, 教友トゥオン・トゥイ・タイン (Thượng Tuy Thanh), 教友タイ・デン・タインと礼生トゥオン・ティ・タイン, ゴック・ホアイ・タイン等々が他の職色と一緒におられた。³⁷⁾このことから、キム・ビエンは南圻における聖座の代わりをするための場所であった。そのような時に、日本の一軍隊がキム・ビエン浄室に駐留しにきた。そのため、フランスの秘密警察は引き下がってあえて正式に更に見張ることをしなかった。この地で6ヶ月が経過すると、教えは急速に人気湧いて広く流行した。』³⁸⁾とあり、フランスの弾圧で行き場を失ったカオダイ教の職色の多くが、当時布教を禁じられていた³⁹⁾カンボジアのプノンペンにあった浄室に集まり、再興を期す中で、日本軍が浄室を借り上げた結果、

フランスの弾圧が日本軍の影響下には及ばないことを学習し、その結果信徒の拡大という再興の兆しが見えてきた事が知れる。

「1942年7月始め、日本兵は浄室を教えに返したので、フランス植民地政府は引き続いて療養所にしたく問い合わせてきた。カオ・ティエップ・ダオ氏は半分を借りる約束を、フランス政府は全部揃って手にいれることを望み、両者は互いに主張を出し合って論じ合い、未だに決定を見ることはなかった。トゥオン正配師はこの困難な情勢を見て、そのまますぐにタイ（バンコク）に出国した。7月末になって、フランスの責任者が互いの主張を論じ合うために秘密警察署にティエップ・ダオ氏を招いたため、ティエップ・ダオ氏は縁起が良くない前触れと知って、建物の後ろの路地から突き抜けて脱出した。何人かの密偵が強制捜査をしたが、教友トゥオン・トゥイ・タンと礼生ゴック・ホアイ・タインをそのまま直ぐに逮捕することなく、一日拘留して午後にはやっと放免した。この状況を見て、職色と道友は上申してさっさと逃げ出す人や、天秤棒を担いで走り逃げる者で、浄室は一層ごたごたと群れて騒然としていた。毎日誰もが人の心理に危機がはっきりと分かる時まで犠牲に胸を叩いていた。（教友タイ・デン・タインは、キム・ビエンで起こったことを、個人的な日記に記していた。）

ティエップ・ダオ氏は再び立ち戻った、この夜にタイン・ソン（Đức Thanh Sơn）がお筆先に降り⁴⁰⁾、教師トゥオン・バァイ・タイン（Thượng Bảy Thanh）が浄室においてフランス植民地政府との外交に当たって処理するよう勧め論じた。すなわち、数日ティエップ・ダオ氏と一緒に戻ったバァイ氏は、安らかで静かな印象に見られた。この時、誰もがバァイ氏はフランス植民地政府の人であることを知っていた。⁴¹⁾とあることから、日本軍から返却されたキム・ビエン浄室をフランス植民地政府は療養所に転用することでカオダイ教の更なる弾圧を企て、尚正配師トゥオン・チュウ・タインはさっさとバンコクに逃れ、交渉に当たったカオ・ティエップ・ダオ氏は逮捕を免れながらも、扶鸞により青山道士の降されたことと

してフランス植民地政庁の人間と知りながら教師トゥオン・バァイ・タインにフランス植民地政庁との外交交渉を委ねようとしたことが分かる。この扶鸞を利用することで、教えの意思統一を図ることをロン・スゥエンで観ていたのがトゥオン・ヴィン・タインことチャン・クゥアン・ヴィンであった。

「当時、教師トゥオン・ヴィン・タインは、居場所を求めてロン・スゥエン (Long Xuyên) に戻り、一族の世話に当たっており、更に氏が南圻と聖会の外における教えが困難な状況に遭遇しているにも拘らず、この状況を慮る人が誰もいない教えの境遇を見て憂い、氏はしばしば全聖会と話し合い、教えを救うための良い方略について計画を立てて準備しているところであった。

1942年8月初め、ある昼に尊い方が全員揃った。すなわち、カオ・ティエップ・ダオ、教師トゥオン・バァイ・タイン、教師トゥオン・トゥイ・タイン (Thượng Tuy Thanh) が教えを救う機関について議論している最中に、タイン・ソン (青山道士) がお筆先に降り、教友タイ・デン・タンと礼生ゴック・ホアイ・タンに師の教えを夜9時に小玉機 (Tiểu Ngọc Co) の力を借りて諭された。タイン・ソン (青山道士) が見通しを降された時、祭壇に仕える職色は全員揃っており、師はバァイ氏に各行動は聖なる教えを遵守したものでなければならないことを諭し、後日白雲洞 (Bạch Vân Động)⁴²⁾で、師弟が初めて互いに会い護法がお戻りになられた時、師が様々な面倒なことを説明する仲介の労を責任を持って引き受け、またそれくらい互いに一層深く愛することは、靈魂を救済する方法でもなく、ただ師の慈悲によっていることによると諭された。」⁴³⁾ このことから、当時のチャン・クゥアン・ヴィンが、越南復国同盟会の南部における活動責任者であることを自覚していたかは別にしても、フランス植民地政庁の弾圧の中でカンボジアにおける宗教活動さえできなくなりそうな状況の中で、扶鸞が教団の意志の確立方法として有効であることを学んだと推測しても

間違えではなかろう。フランス植民地政庁側の人間である教師トゥオン・バエイ・タインに外交交渉役を扶鸞で指名しておきながら、弾圧がやむことなくカオ・ティエップ・ダオ自身バンコクへの逃亡をせざるを得ない状況を知るや、再度扶鸞を利用して白雲洞での師弟関係を論じて博愛と公平の理念の再確認を迫り、論しているように思われる。

カオ・ティエップ・ダオは、自らの国外逃亡後のカオダイ教のあり方を、3月下旬に話し合った仲間の中でバンコクに逃れた正配師トゥオン・チュウ・タイン師とご自身を除いた教師トゥオン・トゥイ・タインと教師トゥオン・ヴィン・タインと教友タイ・デン・タイン、それに2位の礼生トゥオン・ティ・タインとゴック・ホアイ・タインに託したように思える。特に付表を見ると、教友タイ・デン・タインとゴック・ホアイ・タインは優秀な霊媒であったので彼らと扶鸞を行い、それを教師トゥオン・ヴィン・タインや礼生トゥオン・ティ・タインが読み解いたり、書き記す役として壇に仕える分担が決まり、それによって神意の形をとって救道救国の路線を求めたのではないであろうか。すなわち「のちの夜に、カオ・ティエップ・ダオと礼生ゴック・ホアイ・タインの扶鸞に教宗の権能に与る方 (Đức Quyền Giáo Tông) が降った。教宗は大変愉快に、そして南圻で2週間以上必要とすることがあるだろうし、教えにとってめでたい知らせであろう、等々の俗世的一幕を改め、教えを転変させるような見通しを明らかに分かるように降され諭された。それは秘密の条項であり、職色は誰でもどのようなことかをはっきりとは分かっていなかった。」との記述は、付表からカオ・ティエップ・ダオと礼生ゴック・ホアイ・タインの扶鸞が行われたのは1945年1月30日と1945年4月3日の仏印処理の前後の2回であり、「俗世的一幕を改め、教えを転変させるような見通し」との記述から「後の夜」とは前の時期すなわち1945年1月30日の夜の扶鸞と知れる。このとき壇に仕えていたのが当時代表教師であったトゥオン・ヴィン・タインことチャン・クワン・ヴィンと礼生トゥオン・ティ・タインと通事

グゥエン・トゥアン・フォであり、「教宗の権」が降っている⁴⁴⁾。その内容も仏印処理を示唆する内容と言える。

「礼生ゴック・ホアイ・タインが日ならずして南圻に戻ってきた時、教師トゥオン・バァイ・タインがフランス植民地政府とどのようにして陰謀を巡らしたかは明らかではないが、フランス植民地政府はきっとしばしば浄室を要求し、カオ・ティエップ・ダオ氏を逮捕することを望むであろう。1942年8月15日に至り、キム・ビエン浄室はテロにあったがまだ誰もあえて進みも退きもしていない。

1942年8月18日、ティエップ・ダオ氏は穏やかではない自らの境遇を推し測り、夜半に日本の憲兵隊に行き川を渡って軍用車両（汽車）でタイに出国した。車に乗る前に、聖会が心安らかであり続け、南圻においては礼生ゴック・ホアイ・タインに期待をし、聖なる教えが諭され、良い兆しを得るであろう⁴⁵⁾とティエップ・ダオ氏は聖会に細かく助言をした。

1942年8月20日、フランス植民地政府はキム・ビエン浄室を取り上げ、天盤（Thiên Bàn,）を引っ越す準備をし、すべての位牌を移すように命じ、乾坤果（Quả Càn Khôn）を破壊した。職色と道友は教師トゥオン・バァイ・タインの面前で流れでる涙を流し続けていた。1942年8月25日、礼生ゴック・ホアイ・タインは、教えと生活を救う機会についての良い知らせを持って南圻に来られた。すなわち、日本の憲兵隊が、国内政治と東京に居られる畿外侯クゥオン・デェ殿下が委託された手紙について互いの主張を出して論じ合うことを目的にサイゴンに大職色を招くために、タイニン聖座に教えの大職色を訪ねるべく人を派遣しつつあるとのことであった。丁度夜10時に、神々に歩みの順調ならんことを祈願した。教宗の権能をもつもの（教友タイ・デン・タンと礼生ゴック・ホアイ・タインが扶鸞を行った⁴⁶⁾）が降った。そこで教宗は、多くの協力して行う仕事⁴⁷⁾を諭し、各行程における条項を説明して教え、教師トゥオン・ヴィン・タインが教えの生活（Đạo Đời）の役目を礼生ゴック・ホアイ・タ

インの手助けと互いに和合しながら果たす重大な全責任を決定した。』⁴⁸⁾ この記述から、教師トゥオン・バァイ・タイン氏を利用してフランス植民地政庁と外交交渉を進めるという温和な対抗策は功を奏さず、キム・ビエン浄室も失い、カオ・ティエップ・ダオ氏も日本軍憲兵隊を頼って8月18日にはバンコクへ逃れざるを得なかった。2日後の8月20日にはキム・ビエン浄室の祭壇までもが破壊されたが、優れた霊媒である礼生ゴック・ホアイ・タインが、日本憲兵隊との会談の招待の知らせを8月25日に持ってきた。この礼生ゴック・ホアイ・タインの動きは些か唐突である。礼生ゴック・ホアイ・タインと日本憲兵隊との接点はどこにあり、どのような関係であったのであろうか。単なる国内政治の意見交換ではなく、そこには越南光復に一身を捧げている畿外侯クウオン・デュ殿下が委託された手紙も議論の対象として明示されていることが分かる。加えて、1942年8月25日夜10時に扶鸞が行われ、ロン・スウエンに戻っていたはずの教師トゥオン・ヴィン・タインが教えの生活の役目を礼生ゴック・ホアイ・タインの手助けを得ながら果たす重大な全責任を決定したというのも、神意とはいえ唐突である。むしろチャン・クウアン・ヴィンがロン・スウエンに戻って教えの再興を考えた結果の計略の表現と考えてよいものと思う。ちなみに、1942年10月28日から1945年3月9日までの扶鸞を「神聖な権能がカオダイ職色グループを導いて、フランス政府を打ち倒す天皇の軍隊との協同作業機関 (C^o Quan Hiệp Tác) を成立させた」⁴⁹⁾とチャン・クウアン・ヴィンは自らの日記で記している。また、この間の19回の扶鸞全ての回に仕壇 (hầu Đàn) の一人としてトゥオン・ヴィン・タインことチャン・クウアン・ヴィンは参加しており、神意を読み取ったか書き写す役割等を担うためと推測される。

3 日本との協力に踏み切る

(1) 日本憲兵隊の二士官との最初の接触

1942年10月4日（壬午の年8月25日）の夜、教師トゥオン・ヴィン・タイン氏と礼生ゴック・ホアイ・タインが日本と協力して仕事を進めることで救道救国の道を歩むという神意による教団内決定がなされた。その決定を、具体的にどのように外交として実現していったのかをみると、「教師トゥオン・ヴィン・タイン氏と礼生ゴック・ホアイ・タインは、極めて重大な使命を受け取り、またそれは外交の仕事であった。もし外交の天才でもなく、外交に特別な力があつた訳でもないなら、トゥオン・ヴィン・タイン氏がこの配役を受けるということは、氏の長所に極めて忠誠であり、全ての教えの信任を十分に得ているがためであろう。

1942年11月18日（壬午の年10月11日）極めて秘密の商業交易室における日本憲兵隊との三夜にわたる会合⁵⁰⁾の後、トゥオン・ヴィン・タン氏はどのように教えの尊旨を説明したのか、またフランス政権当局者の過酷な専制の下で何で承知せねばならないのか？ 全ての大職色は流刑にされ、寺院は閉門にされる等々、教えの精神はどうにも憤懣やる方なくさせられ、今日やっとこの新たな会合を得た。

最後に両者は多くの原則で同意し、多くの行動プログラムを交換した。この時に日本政府当局者は、カオダイ勢力がインドシナにおける唯一の極めて高尚な政治的性格を持った宗教であることを初めて知った。日本の憲兵は全ての教えが願望を十分に叶えることができるよう導き保証することを約束した。約束し終わったあと、トゥオン・ヴィン・タイン氏は万事がもと通りになるよう手配を終えてキム・ビエンに立ち戻った時、引き続き仕事をし続けて行くためにサイゴンに事務所を設けることを約束した。⁵¹⁾とあり、具体的な多くの行動プログラムの内容を明示してはいない。ただ「日本の憲兵は全ての教えが願望を十分に叶えることができるよう導き保

証することを約束した」という文学的な修辞の中で、カオダイ教の意図が基本的には口頭で確認されたことを示している。このことから、カオダイ教タイニン派が存続をかけてただただ日本憲兵隊に庇護を求め、その庇護のために日本軍との行動プログラムに同意した追い詰められた状況と日本への期待に光明を見出した安堵が窺い知れる。

(2) 日本憲兵隊の二士官との最初の接触の前後

チャン・クワン・ヴィンの回想録によれば、「1942年11月24日（壬午の年10月17日）本部をサイゴンに戻し、聖座にいる護法に上奏した歴史的復呈書の意図の進展（協力機関（CƠ QUAN HIỆP TÁC）の成立）に従って全ての仕事を続けた。」⁵²⁾とあり、日本憲兵隊の二士官との接触からわずか6日で「協力機関」の創設を決している。教えの内部における意思決定としては理解できるが、その具体化は些か急である。逆に言えば、事前にシナリオがあり、それに従って教団内の意思決定が扶鸞を活用してなされたと考えれば理解はできる。その間の記事を見ると、「キム・ビエンでの仕事が終えたばかりの時、トゥオン・ヴィン・タイン氏はロン・スウェンへ戻り人材を召集し、仕事のプログラムを立案した。当時ロン・スウェン事務所で、職色と道友が出入りして騒々しく、討論をし、教えを解き放つための道に出会っているようで、誰もが希望に満ち溢れひどく楽しい様子であった。

夜になって、李大仙（Lý Đại Tiên）と教宗の権能を持つ方に道のりや極めて楽観的な多くの知らせを明らかにして教えてくれるよう祈願した。教宗の権能を持つ方は1942年11月18日（壬午の年10月11日）にサイゴンに出発すべきと細かく助言した。18日の夜明けに、ロン・スウェン事務所は解散し、サイゴン地方に上った。六省に行った人もいた。また、午後になって秘密警察が捜索にきたが、礼生トゥオン・ティ・タイン（Thượng Tỷ Thanh）ただ一人が答えるためだけに居ただけで、何事も

起こらなかった。

サイゴンに出発する前に、トゥオン・ヴィン・タイン氏は全職色のためにこの報せを秘密裏に宣伝のための責任者である各人に宛て、全国すべてにわたってほとんど活動計画を立てて考え、その一方で氏ご自身について言えば、本人が礼生ゴック・ホアイ・タインとトゥオン・ザイン・タイン(Thượng Danh Thanh)の二人の随行員とサイゴンに直接上った。』⁵³⁾とあり、キム・ビエンからロン・スゥエンに戻るとすぐに日本軍との協力による救道救国機関の創設に向けた全国組織化の仕事の準備に取り掛かっていた様子が知れる。なお、付表の1942年11月17日(壬午の年10月10日)にロン・スゥエンでの扶鸞に降ったのは李大仙と教宗の権能を持つトゥオン・チュン・ニュット(Thượng Trung Nhựt)であり、整合性を持っている⁵⁴⁾。それにしても日本憲兵隊の二人の士官との接触が18日であるとする、18日の夜明けにロン・スゥエンを発してもサイゴン到着は早くて夕刻と考えねばならず、些か日程的には無理があり、第1回目の接触も時呈を約束してのものではなかったものとも想われる。日本憲兵隊の通訳で礼生ゴック・ホアイ・タイン氏の親族であるルウオン・ヴァン・トゥオン(Lương Văn Tường)氏に紹介の労をロン・スゥエンであったときに頼んでいた⁵⁵⁾ことから、まずはサイゴンへ行き、ルウオン・ヴァン・トゥオン氏を尋ねたといったことであろう。

すなわち、「サイゴンに上った最初は、日本憲兵のための通訳であり前にカオダイ教と日本憲兵との仲介の労をとった一人でもあるルウオン・ヴァン・トゥオン氏の店であるマクマホン通り(đường MacMahon)4番地にとりあえず留まることとした。最初の時期、全ての教えにとってトゥオン氏は恩人であった。

この根拠地で芽吹きが現れたのは、教師トゥオン・ヴィン・タインが外交活動の主事となり、礼生ゴック・ホアイ・タインが接客と根拠地の保持に当たり、礼生トゥオン・ザイン・タインが秘書をしながら逃げる心配も

するという、この三人の師の役割が示された時である。

日本の憲兵は、仕草・品行・素行・仕事ぶりから極めて豊かな経験者に見えるトゥオン・ヴィン・タイン氏のような仕事をする人と会ったばかりで、大変満足し十分に信頼を置いた。

1942年11月22日、全職色集会の前に手紙を出して明らかにするため、教師トゥオン・ヴィン・タイン、教友タイ・デン・タンと礼生ゴック・ホアイ・タインの三人が自分で直接に外教聖会（(Hội Thánh Ngoại Giáo)（報恩堂（Báo Ân Đường））に出向いた⁵⁶⁾。宣伝主義の目的は、南圻の一統に瀕した国で直ぐに動員することを全教えの精神に呼びかけるためであった。人徳がなく呼びかけに応じようとしなかった教師タイ・キィ・タイン（Thái Khy Thanh）、士オファウイン・ヴァン・ロイ（Huỳnh Văn Lợi）とグウエン・ゴット・ハァイ（Nguyễn Nguyệt Hải）を除いて、全職色と道友全体に皆歓迎され鼓舞された。キム・ビエンで完了したことに心を傾け、引き続いて南圻に立ち帰った。」とあり、この報恩堂における扶鸞には教師トゥオン・ヴィン・タイン、士載ファウイン・フウ・ロイ（Huỳnh Hữu Lợi）の他に、両派の職色、職事（Chức việc）、諸道友全体が壇に仕えた。文字通りキム・ビエンにいた教え仕える人総出で神意を確認して、日本との「協力機関」成立の基盤整備をしたといえよう。

（3）サイゴンにおける第1回全職色の会合

予備会議と教団内部の方向性を確認した上で、全国の代表12人を招いた上での日本側2人との14名で、協力のあり方に関する会議がもたれた。

すなわち、「1942年11月中旬、礼生トゥオン・ザイン・タインは、南圻各省を代表する各職色を、続けて北・中圻（Bắc, Trung Kỳ）とカンボジアの全代表を招きに行くよう命令された。1942年12月1日、インドシナ全体の教えの代表権を持つ大職色（これらの方は証明を為す本の中で名前のある方）は丁度12人居られた。日本政府側は、木村と望月の二人

の代表士官であり、ルウオン・ヴァン・トゥオン (Lương Văn Tường) とフウイン・カイ (Huỳnh Khai) が通訳をした。すなわち、教師トゥオン・ヴィン・タインが開幕スピーチを読み、教えの願い望むことを伝えた。両者は4時間に渡って議論をし、民族の前途まで関係する極めて多くの項目を論じ合った。おおよそ、インドシナに來た日本軍は、侵略のためではなく白人の植民地支配から脱出し自由にするつもりである。東京側では、日本政府は畿外侯クウオン・デュ殿下を擁護し越南復国同盟会 (Việt Nam Phục Quốc Đồng Minh Hội) を設立し、正に侯をこの機関の委員長として久しい以前より力を広げた。日本軍はこれまで英・米と戦争をして防衛線を拡大した他に、この後の目的を達成し易くし、国家勢力の統一のために (ヴェトナムの) 各政党と秘密の交渉をせねばならなかった。そのため各政党により、カオダイ教が大多数の大衆の信頼と国家的な精神を持った一宗教であることを日本軍はよく分かっていてた。それゆえ、今日新たに協同して仕事を行い、相互に国内の秘密活動に携わることに着手した。

そうして、両者は何度も相互支援を約束した。日本軍は、フランス当局の無理強いに対して職色を保護していくであろう。一方教えの側はこの時から各々の信徒は日本軍を支援する有能な愛国者でありえるであろう。またその他に、教えの青年たちに日本軍の支援に参加したり、海・陸・空軍への入隊に志願するよう呼びかけた。

この会合で、両者は皆、関係の原則を議論し大変満足し、双方が将来を約束する新しい道を探し求めているようである。

解散した後、全職色は更に教えの側の仕事を議論するためにグループ集会をもった。このグループの中で、護法と大天の封じた諸位が不在の間はインドシナにおける教えの全体に代わる代表として教師トゥオン・ヴィン・タインを職色全体で同じく信任した。教師トゥオン・ヴィン・タイン氏が、日本当局者や国内各政党とも交渉に当たり、東京に居られる畿外侯クウオン・デュ殿下の各代理の方とも接触に当たることも信任した。このように、

上述した天の手紙 (Thiên Tho) は教え全体の十分な信頼の下にあった。⁵⁷⁾ 会議は成功し、インドシナにおけるカオダイ教の各代表者の承認の下で「協力機関」を運営できることとなった。それは単に日本との協力と言うことではなく越南復国同盟会のヴェトナム南部における現地機関としても活動できるということであり、日本の憲兵隊がカオダイ教徒を保護する代わりに、カオダイ教徒の協力と日本軍への支援、更には日本軍への志願による参加にまで道を開くものであった。加えて、チャン・クワン・ヴィン氏が教えの全体に代わる教師として信任を得、さらに畿外侯クウオン・デェ殿下の各代理の方とも接触に当たることの信任も得たということである。逆に言えば、チャン・クワン・ヴィンは日本軍や畿外侯クウオン・デェ殿下の意向を得て教団運営に当たることができるようになったことを意味する。

(4) 各政治党派との連盟

チャン・クワン・ヴィンは早速に、日本軍の防衛線拡大に伴いこの後の目的を達成し易くするために国家勢力の統一のためにヴェトナムの各政党と秘密の交渉をし始めた。

すなわち、「教師トゥオン・ヴィン・タイン氏は、外交について天才的であり、ほとんどの愛国的グループと和合し、当時国内でも大変多くの党派が急に発生し、全体が親日であり丁度ヴェトナムの独立運動にも当たっていた。その中で、「越南国家独立 (Việt Nam Quốc Gia Độc Lập)」党が注目に値し、最大勢力であった。というのは、この党は「越南復国同盟会」の支部であり、またグウエン・ヴァン・サム (Nguyễn Văn Sâm)、ズウオン・ヴァン・ザオ (Dương Văn Giáo)、チャン・ヴァン・アン (Trần Văn Ân)、ホォ・ヴァン・ガァ (Hô Văn Ngà) 等々のような人材が居た。カオダイ教が、トゥオン・ヴィン・タイン氏の交渉により政治性を打ち出したことを聞いてから、各党派は皆真面目にカオダイ教と連

盟を組み、同じことを語り、最初に「国家独立」党が、次いで別の各党派が皆順番にカオダイ教の支援に当たり、人員を支援したり、財政を支援したりした。その結果として殆どカオダイ教の恩をどこでも寿ぐこととなった。』⁵⁸⁾とあり、国家勢力の統一のみならず国家の独立のために人材の動員や支援が越南国家独立党を中心に図られたことが分かる。

また、畿外侯クウォン・デェ殿下の意向を確認するためにも、チャン・クワン・ヴィンは当時のヴェトナムにおける畿外侯クウォン・デェ殿下の各代理の方とも接触に当たる必要があった。そこで、「1943年初め、チャン・ヴァン・アン氏に頼んで、トゥオン・ヴィン・タイン氏は「越南復国同盟会」の団長に幸いにも引き会わせてもらえるようにしてもらった。この方の名は日本人トン・ハ（松下 Tòng Hạ）で、大南公司会社 (hãng Đại Nam Công Ty) の主であった。松下氏は畿外侯クウォン・デェ殿下の指令を得て、ヴェトナムのために使命を委託され、日本の参謀部 (Bộ Tham Mưu Nhật) の擁護のもと極めて多くの影響力を持っていた。同時に、国内の政治党派は皆松下氏の指揮権下に属していた。カオダイ教も他の各党派と同じように松下氏の命令に従った。しかし、徐々に松下氏はトゥオン・ヴィン・タイン氏に接近し、カオダイ教の仕事や思想をますます知るようになり、さらに一層信頼と支援と指導を寄せるようになった。』⁵⁹⁾とあるように、大南公司社長松下光廣⁶⁰⁾に会いに行ったことが知れる。ただ、越南復国同盟会の代表はクウォン・デェ殿下であり、同組織に「団長」という正式名称は耳にしない。応援団長と言った程度の意味か。しかし、松下光廣氏がクウォン・デェ殿下と極めて近い立場にあったことは、「クウォン・デ公とカオダイ教」と題する記事があり、そこに次のような記事がある。

「松下光広と越南復国同盟会の盟主クウォン・デ公との個人的交際は、実に三十数年来のことであった。大正十年（1921）、文通が始まる。大正十四年（1925）、日本帰国中の彼に、ある人が、「安南の志士クウォン・デ公を

東京で紹介しよう。」と言ってきた。そのころ、クォン・デ公は、中国名『林順徳』を名乗り、本郷区追分町三一番地の第二中華学舎内に身をひそめていた。(中略)この時は、下手に軽挙妄動すれば、フランスの出先官憲によって双方が困難な事態に落る懸念があった。残念ながら、会見を見送る。

二人の接触が実現したのは、昭和3年(1928)のことである。商用で海南島に赴く途中、台北に立寄った松下光広に、新聞記者がインタビューに来た。彼は、仏印事情について語った。気候・風土・産業・経済一般に関する彼の談話内容が、新聞に掲載された。折良く台湾に来ていたクォン・デ公が、その記事を読んで、早朝の六時ごろ、光広のホテルを訪ねて来たのである。公は、いくらかとおとつとした日本語で、あれこれ語りかけてくるのであった。

(中略)この出会いをきっかけに、独立の志士クォン・デ公やその血盟グループと、天草人松下光広の結びつきが生まれたのである。彼は、この時以来、日本のクォン・デ公、シンガポールのチャン・バン・オン(陳文恩)、バンコクのヤン・バン・カウ(楊文教)ら、亡命中の志士たちに生活費をかねた活動資金を送りつづけた。また、このころから、亡命中の指導者とインドシナ現地独立党員との連絡は、松下光広を介して行われるようになった。

クォン・デ公自身も、連絡書信の中で、常々、「現地においては、余の代行として、松下氏の指導を仰ぐように。」と、書きそえていた。志を抱くベトナムの人たちが、松下光広を頻繁に訪問してくるようになる。」

「クォン・デ公の存在には、サイゴンに本部を置くカオダイ(高台)教の百五十万〜二百万と称される信徒集団が信仰に近い尊敬の気持を寄せていた。(中略)昭和十八年(1943)カオダイ教の有力指導者の一人チャン・カン・ビン(陳光栄)が、越南復国同盟会の前記チャン・バン・オン(陳文恩)に同伴して、大南公司へやってきた。チャン・カン・ビンは、四千

人ばかりのカオダイ教徒労働者を組織、日本軍用造船所の仕事をしていたのであるが、松下光広に訴えるのであった。「カオダイ教徒は、すべて、独立の志に燃えている。盟主クオン・デ公に、あなたの橋渡しをお願いしたい。…」⁶¹⁾

松下光広とクワン・デュ侯との出会いから代理になった経緯。資金援助の事実、チャン・クワン・ヴィンとの出会いと、それによる 4000 人の労働者の日本軍用造船所への組織的動員を知ることができる。

また、難波千鶴によれば、「日本は大越の民族主義者たちと親密な関係を結び、親日や親クワン・デュの幾つもの政治的グループが構成され、政治的・財政的な保護を引き替えに彼等のサーヴィスを勝ち得た。また、日本はコーチシナにおけるカオダイ教とホアハオ教という 2 つの政治宗教的組織との協力に出会った。大南公司という日本の貿易会社の社長である松下光広は、カオダイ教と日本との接近の中で危険を構わず重要な役割を演じた。松下は、クワン・デュの大切な保護者であり友人であり、松下はコーチシナにおけるクワン・デュの代理人と言われた。松下の仲介によって、民族主義者たちの手紙や金銭が日本のクワン・デュの下に送られた。松下はカオダイ教に大きな影響力を持ち、「カオダイ教徒の頭」と言われた。松下を介して、カオダイ教は 1939 年以来クワン・デュを保護し、カオダイ教の「法王」ファム・コン・タック (Phạm Công Tắc) が受け取った神のメッセージに従って極めて都合良く日本が到来するものと期待された。また、松下の仲介によって、日本軍はカオダイ教に急速に接近し、カオダイ教の勢力と信徒たちを動員する熱烈な信頼に関心を持っていた。」⁶²⁾とあり、松下が「カオダイ教徒の頭」といわれたのがいつのことで、誰によってなのかは定かでない。松下が「カオダイ教徒の頭」といわれたのは、仏印処理後に高台教奉仕隊司令官になったためと思われる。それゆえ、1943 年以前からの影響力を否定するつもりはないが、チャン・クワン・ヴィンとの会談以前に、フランスの弾圧からカオダイを救済し

ようとした事実は見られない。また、カオダイ教への日本軍の接近は「カオダイ教徒の頭」といわれた松下の仲介によるものであるということに関してもその論拠は定かではない。

(5) チュウ (Trù'u), チュ (Trú'), ザァイ (Giải) の破壊陰謀

代表教師への就任で、チャン・クワン・ヴィンの救道救国のための日本との協力機関の創設事業は順風満帆に思われたが、実際にはそうでもないようであった。

すなわち、「ほどなくして、成立した機関は、全ての教えが皆呼びかけに依じて一つの道に従う代表教師 (Giáo Sư Đại Biểu) (これよりトゥオン・ヴィン・タインという名詞に代わって代表教師とする) の指揮権の下に置かれた。ただ聖座でのみ、礼生ゴック・チュウ・タイン (Ngọc Trù'u Thanh), ゴック・チュ・タイン (Ngọc Trú Thanh), トゥオン・ザァイ・タイン (Thượng Giải Thanh) の三人が、互いにどのように議論されたのかを当時知らずに、代表教師と全ての聖会の職色のなされた仕事に反動的な手紙を出し、知見を集めた。彼ら三人の手紙は土曜日に南部・中部・北部のあらゆる地域に同じように送られた。その宣伝の目的は、でたらめを誇張し道友が呼応しないように邪魔をすることにあり、次のように言っていた。すなわち、各氏のサイゴンでの仕事は邪教に迷ったり、邪教の門のそばで…等々といったものであった。

この三人の誤解を解くために、代表教師は手紙を書き、彼らを招いて会見し彼らが理解するために説明したり、大職色を聖座に派遣して何度も聞いて彼らのために説明をした。結局、全てのあらゆることを十分に聞き、東京から送られてきた秘密の証拠をすべて見るために、礼生ゴック・チュウ・タインが他の二人の代わりに一度サイゴンの根拠地に来た。彼らがどのように議論したかも分からないままに終わり、聖会の在籍証明に応じて名を記すこともなく、不正な生き方を改め正道に戻ることもなく、そのま

ま静かに帰り、引き続き間断なく活動を続け、機関にとって一つの障害になっていた。聖会は皆待ちきれなくて苛々し始め、もしそのように黙っているなら、彼ら三人は引続き活動させ、その結果として教えの中での生活に良くない揉め事は批判を招き、機関が拡張しにくくなっていた。キム・ビエンでは、教師タイ・キィ・タイン、二人の士載フウイン・ヴァン・ロイ (Huỳnh Văn Lợi) とグウエン・ゴット・ハァイ (Nguyễn Ngươn Hải) が、またさらに中部の他に教友ゴック・タイン・タイン (Ngọc Thành Thanh) と礼生フウオン・ロック (Hương Lộc) が復国機関に抵抗して、混乱も沸き起こった。代表教師は自ら彼らを悔いて、慈悲により彼らの減刑を望んだが、聖会は皆彼らの処理を憲兵隊の決定に委ねた。というのはチュウ、チュ、ザァイの仕事は内部のフランス植民地政府の手先であることが明白に感じ取れたからであり、彼らは一生涯をかけて償うこととなった。もし、当時聖会が一層強い勢力を持っていたとしたら、不穏な情勢を制圧して世の中を平和にすることができたであろう。

1943年1月3日、日本の憲兵隊は直接に聖座に至り、国家に反逆し教えに反したチュウ、チュ、ザァイの三人を逮捕し、その夜のうちに憲兵隊(商業交易室)に連れ帰り、憲兵隊は朝まで仕事をした。その横にあるマクマホン通り4番地の根拠地では、明らかにチュウ、チュ、ザァイは拷問を加えられて自供させられていると思われ極めて悲痛な様子がうかがわれた。代表教師はその様子を見て、三人のために神々に嚴罰の刑を軽減するよう祈った。氏の慈悲に心動かされるが、確かに徒らに推測すべきではないが罰を受けて当然のことでもある。誰も拷問を見たわけではないのだから、辱めるために罵った言葉を思い起こしたり、したことを思い出して哀れんで動揺したり、三人の賭け事をして誰も腹を立てたりすることはない。この罪過は確かに受けて当たり前のものであり、全く痛恨に思うようなものではないが、聖会は以前から知っていたのであるから、妥当な方法で和解していれば今日になって初めて状況を聞かずに済んだであろう。代表教

師は度を越した拷問と思い、師は減刑とその拘留をやめるよう請うたことがある。

反動の頭目が拘留された日から、組織は日に日にその能力を加えていった。この氾濫を鎮圧する中で最も功績があったのは、教友グウエン・ヴァン・タンであった。」⁶³⁾とあり、礼生ゴック・チュウ・タイン、ゴック・チュ・タイン、トゥオン・ザイ・タインの三人がフランス植民地政庁の手先として協力機関の確立・進展に異を唱えたため、聖会はその処置を憲兵隊に渡したため、「反動の頭目」とされた三人は拷問にあって厳罰の刑に処されたようだが、チャン・クワン・ヴィンが慈悲を示して減刑を求めたことで、教団内の慈悲深い指導者としてのイメージの獲得に成功したように思える。

(6) 大勢人が集まって賑やかな根拠地

「反動の頭目」のいなくなった後のカオダイ教タイニン派では、日本への協力が復国に通じるかのごとくに、多くのボランティアや支援希望者がカオダイ教の各サイゴン根拠地に集まり始めた。すなわち、「一年間の経過の中で、機関は拡張し、全国の民心は、日本と協力して仕事をするカオダイの名声が盛んに沸き起こり、日本と協力してのカオダイの仕事もあらゆるところに広まった。各地の道友はただちに党派の元に行き、あちこちらの世間の人々は代表者を派遣して行動を見ることが出来る根拠地を訪問した。そのために、店の階上の部屋は人が多くて窮屈で皆狭くなっていた。僧籍を証明するために、1942年11月1日に道友の職色は日に日に呼応してますます多数の人が集まって、李大仙や教宗の権能を持つ方の聖なる教えを聞いたり、畿外侯クワン・デェ殿下の政治綱領とプログラムを聞いた、多くの人は涙を流して仕事に奮闘することに大変熱中した。

そのため、当時のサイゴン・チョ・ロンにはそのような根拠地が3箇所あったが、仕事をし終えることはなく、別のところに住むためのホテルを

借りねばならなかった。当時の4番目の根拠地は、聖会が完全な主となりえた。ルウオン・ヴァン・トゥオン (Lương Văn Trường) 氏は、広範な範囲の仕事を別の地に移り変わった人に教えるために譲渡した。

人々が群れば群れるほどますます活気に満ち、ますます多くの仕事をし、そのために根拠地は仕事をする人の数を増やさなければならなかった。礼生ゴック・ホアイ・タイン氏は毎日毎晩しばしば接客をしていたために、氏の持病の慢性疾患の痛みに耐えきれず、腹部手術のためにチョ・ライ診療所 (Dưỡng Đường Chợ Rẫy) に入院し、胃の切除と腸の切除をし、仕事を6ヶ月間休まねばならなかった。そのため、礼生トゥオン・ティ・タンがチョ・ロン静室の根拠地でホアイ氏に代わって接客のための仕事をせねばならなかった。⁶⁴⁾とあり、サイゴンの根拠地では部屋にぎゅうぎゅう詰めになるほど人が集まり、聖なる教えを聞いたり、クウオン・デェの政治綱領とプログラムを聞いたり、多くの人が仕事に奮闘することに熱中した様子を知ることができる。その結果接待役の礼生ゴック・ホアイ・タインは胃や腸の切除手術をせねばならなくなるほど多忙であった。

4. ヴェトナム復国同盟会の一機関としてのカオダイ教の 日本とのかかわり

(1) 畿外侯クウオン・デェ殿下との交渉

1942年12月1日にインドシナの各地区のカオダイ教代表者会議で救道教国のために日本との協力機関の創設が承認され、代表教師となったチャン・クワン・ヴィンも、「反動の頭目」の問題はあったものの全体としては順調なスタートをきったように思われる。そのことは付表でも1942年12月から1943年7月末までは扶鸞を通して教団内の統一を図る必要がなかったことから窺える。しかし、それは越南復国同盟会の協力機関としての認知が進み、独立への期待が高まることを意味し、フランス植民地

政庁の桎梏との軋轢が高まることを意味している。すなわち、「1943年夏、代表教師の外交のおかげで、日本の多くの客人を大変幅広く知ることができた。そのおかげで、畿外侯に多くの幸運な事や、教えの政治組織図や経書等々を送った。

1943年秋の初めになって、畿外侯の返信が戻ってきた。その手紙に誰もが感動し、愛国心が益々沸き起こってきた。畿外侯の手紙には、しばしば写真や国内宣伝のための多くの勸進国民歌 (Khuyên Cáo Quốc Dân Ca)⁶⁵⁾が添えられていた。

その手紙の中で、畿外侯は代表教師に「越南復国同盟会」副団長の職を授けた。すなわち松下団長に次ぐ人である。極めて名誉があって光り輝いていることか。しかし、いかに重大なことか。どのような理由で以前から各党派が成立しているのか、多くの人材は、畿外侯はどのような理由でこの責任をより才徳と仁徳のある方に任せずに、最初に畿外侯と交渉した人である代表教師チャン・クワン・ヴィンに今日まで任せようとなされたのか。新しいそれは真の命であり、前世から決まってもいた天の書でもあった。

畿外侯を擁護する党派が極めてたくさんあったにもかかわらず、ただカオダイ教だけが最も信頼を得て、重大な責任を受けるに相応しいと知られていた。

その時から2-3ヶ月して、畿外侯との手紙の往来があり、東京側の畿外侯はヴェトナムの国土や国内情勢を理解することができるようになり、万事の行動は畿外侯の聖意に叶うことができるようになった。⁶⁶⁾とあり、チャン・クワン・ヴィンは「越南復国同盟会」副団長に任ぜられた。副団長と言うのは副応援団長と言った程度の意味か。それにしても、クワン・デュからの手紙の往来が多くなるということは、実質的に大きな復国勢力を持たず、アジア・太平洋戦争の局面で劣勢になりつつある1943年秋以降の日本の軍部に引き続き頼るしかないクワン・デュにとって、カ

カオダイ教は大きな復国の期待であるとともに、カオダイ教から見れば様々な無理難題を課せられることを意味している。

(2) 全国動員

カオダイ・タイニン聖座派がクウオン・デュとのつながりを深めるにつれて、カオダイ・タイニン聖座派の教徒の多くは越南復国同盟会会員となり、日本の戦勝の中で益々独立への期待は膨らんでいく。すなわち、「大東亜戦争において、日本軍が勝利するにつれて、「越南復国同盟会」の機関はますます拡大し、ほとんどすべての国民が、異口同音にカオダイ教の宣伝に呼応した。そのため、当時はそれぞれのカオダイ教の信徒は、「越南復国同盟会」の会員でもあった。彼らは全ての生命財産を犠牲にして一つの心を同じくし、国に独立を得るために心を砕いていた。如何ほどの金銭が必要なのか、どうしたら良いのであろうか。多くの志願兵は、一部は丁度命令を待ち、一部は海・陸・空軍に入り、訓練を受ける覚悟ができていた。

実行面では、カオダイ教は大変有能な日本軍のために、政治・軍事・経済・交通から、空の果て海の淵まで、全ての教えにある者がそれぞれに皆援助をし、あちらこちらでカオダイが呼応した。そのために1945年3月9日のクーデターの日、日本軍が容易に勝利できたのは、「越南復国同盟会」の機関の大部分のおかげであった。

当時の国民精神を見ると、祖国の将来を祝うに足り、大事を任命した時は突然の条件の変化にすぐに対応した。それゆえ、ヴェトナムの独立は100%勝利と見なされた。』⁶⁷⁾とある。カオダイ教徒からすれば、独立の夢に心酔し、すべての生命財産を犠牲にする覚悟で独立に心を砕き、多くの志願兵がいて、政治・軍事・経済・交通から、空の果て海の淵まで支援したればこそ明号作戦も可能であったとの解釈が当然のことにように主張されている。国民精神を見て、祖国の将来を憂うのではなく祝っているの

ある。そのような倒錯を招くほど、それほど多くの志願兵や、支援者やその予備軍が多かったことを意味している。逆に言えば、フランス植民地支配がそれほど過酷であり、独立への思いが募っていたことを意味するものと思われる。

(3) 日本への不満と苦痛

越南復国同盟会会員でもあるカオダイ教徒の溢れ出て拡大する復国への思いと、ほとぼるる愛国心は、フランス植民地政庁の弾圧からカオダイの活動を日本の憲兵隊が保護するという1942年12月1日、インドシナ全体の教えの代表権を持つ大職色と二人の日本憲兵隊の士官との会談の中で約束されたことを前提として成り立っていた。しかし、それは日本軍人の守ってやっているという態度や、時に保護する約束を果たそうとしないことを許容するものではなかった。すなわち、「日本がカオダイ教とすでに親しい間柄である時、日本はカオダイ教が別の者と親しい間柄となることを望まない。代表教師は最高参謀部 (Bộ Tham Mưu tối cao) から国内のほとんどの政治運動に交渉を持っている各軍備機関や各政治家までと大変幅広い人脈を持っている。そのために、大変細かく比較してうらやむ憲兵隊 (Sở Hiến Binh) は、何度も何度も極めて面倒でうんざりすることを求めた。

各党派にはたくさんの良い部分もあるが、また悪い部分もあり、日本はカオダイ教が有能となることを好まないように思えるし、多くのカオダイ教徒を愛してもいない。金銭を利用したがる人はたくさんいるが、カオダイ教の金銭は極めて特定の目的のためのものであり、これまでに占有したことはない。だから、日本が突然に断りもなく入り込み、あれこれと批評をし、そのためにカオダイ教に別の計略を広めた。日本人は疑り深く、言うことを聞きさえすれば日本人は信用するそうだ。カオダイ教の根拠地の住所を要求したり、カオダイ教のために憲兵隊とさらに仕事をしたくなか

ったり、また別に保証を文書で要求することもあった。

このような状況を見て、日本はこれ以上の保証を望んでいないし、日本がカオダイ教を放置しさえすれば、フランス政府は大変喜ぶであろうことが分かった。憲兵隊の保証をなくしたら、他の保証など価値はないし、当時のフランスは憲兵隊の威信をただ忌み嫌うだけであったことを知らねばならなかった。

それでもなお、カオダイ教に対する憲兵隊が控えめにできないことは、その尉官の個性にすぎないと分かった。代表教師は引き続いて参謀部に運動し、日ならずしてその尉官は別の地に交代させられ、憲兵隊はただちにカオダイ教への態度をまともに変えた。

各親日的ヴェトナム人グループに対する日本の態度を見ると、どれもこれも大部分の人は皆落胆してこれ以上の仕事をしたくなくなる。日本はヴェトナムに多くの約束をしたが、どこにも独立は見られないし、日本がフランスに譲歩する時はいつでも、親日愛国者の人たちが捕えられ、日本は干渉することはできずにいることを見ると、今日この条約を締結するが、明日また別の条件を記すこととなろう。多くの人が日本と関わりをなくしたいと思い、ひどく厳しく辛いフランスの災難にビクビクしていたが、今ではさらに増える日本の災いの足枷に如何ほど苦しまねばならないことか。

ただカオダイ教のみではなく、ヴェトナム国の将来はどこに向かっているのだろうか。どれくらい変容するか全国の運命をカオダイ教は掌の中の地図を把握するように前もって分かっていた。それゆえ、日本に対して利用されるだけではなく、カオダイ教も聡明さと時の流れに従って日本をも利用することを知らねばならない。十分な徳信のある代表教師は、舳先に立ち竿を握り、必ずや教えの船を目的地まで導いてくれるであろう。たとえどのように多くの障害や艱難にあったとしても、氏と職色、大小の道友はそれでも引き続き志を持ち続けていく。

そのために、日本の政界は日増しにカオダイ教への理解を重ね、ますます

す信任し尊重するようになった。』⁶⁸⁾とある。日本のフランス領インドシナにおける原則は公的には静謐保持にあった。実際には、カオダイ教に対しては半ば公的に独立運動を支持することで、現地情報の収集と労働力の確保を目的としていた。現場では、カオダイ教徒である愛国者の保護も空約束であることが随所で明らかになっていった。1944年8月にはヴィシー政権も崩壊し、日本軍の劣勢が明らかになれば、いつまでもフランス植民地政庁が日本の憲兵隊を忌み嫌ってはいない。日本も南方戦線の後方兵站基地としての仏印の平坦業務の一端を担う労働力の確保が狙いで、仏印の独立を望んではいないという本質が見透かされ、逆に日本に利用されるカオダイ教から、カオダイ教は日本を利用することを学んでいったと考えられる。カオダイ教はフランス植民地主義の首枷から逃れるために日本の保護を求めたが、口先だけの保護が日本の新たな首枷に通じていることを学び取ったのである。

(4) カオダイ教は「協力して一つの事業を行う」(Hiệp Tác) 主義を実行する

フランス植民地政権の支配下にあって、復国のあり方をどのように考えるのか。利用されるカオダイ教からどのようにしたら日本を利用して独立を果たすことが可能であるのか。時代状況を考えて、劣勢に耐える日本にとって欠くべからざるパートナーであり、日本の大東亜共栄圏構想に加えられる実力をカオダイ教が獲得しない限り、カオダイ教はいつまでも利用され続けるしかないであろう。越南復国同盟会の支部として、救道救国の道確立するには、とことん日本に協力して日本にその実力を認識させるしかないと考えたものと思う。すなわち、「時勢のせいで、カオダイ教全体は当時政治的であらざるをえなかったし、「協力して一つの事業を行う(Hiệp Tác)」主義を実行する必要があった。以前から今日までのカオダイ教の道友である職色の罪業は、教えの側に従って修行することに心を砕

くことができるが、政治を行うとは何をどのようにしたら分かるのか。それにしても、国事に当って協力して一つの事業を行うために、聖会の命令に同意して、髪を刈り、髭を剃り、変装して外形を改めた。

学のある青年たちの仕事は相応であったのに対して、学の少ない老いた方々に哀れなのは、任務遂行結果の報告書が上級機関に報じられた時、貧困に困って学がないため極めて簡潔なものしか書けなかった。しかし、小さなことから大きなことまで代表教師が教え諭し指導したおかげで、任務遂行結果報告書は次第に周到に教えを伝えることのできる専門家の秘密の策略や規則に従って改正されて提出されるようになっていった。それによって、どれほどもせずして、全教えは物質的なことから精神的なことまで極めて多くの進歩的なことを吸収した。

短期間が経過し、カオダイ教の協力によって一つの事業を行う機関の方針は大変完備したものとなった。天の縁や海の隅、あるいは山の麓の緑の森に居ようが、あちらこちらでフランス人が居るところはいつもカオダイ教徒がいた。今、細々とした雑多な事情を思い起こしていただきたい。すなわち、日本と英・米との戦争の間は、敵軍が森の中に落下傘降下をしたり、どの様な海の縁であっても人に知られないように潜水艦は出入りし、どのような野原に被弾した飛行機が頭から突っ込もうと、有能な道友が引き続いて居り、道友が有能であれば、自ずといつも自然に日本の兵隊も有能なのである。フランス軍の各基地はどんな所に駐留し、どれ位の兵隊が居り、どんな種類の兵器があり、地下に掘った通路に埋められているガソリンや弾薬等々、道友が知り得たものであった。

大都会から小さな省の都市まで、皆このような組織があり、余すところはなかった。仏領インドシナ総督府やコーチシナ総督府から各軍事要衝に至るまで、フランスのために働いている公務員は、反動的な性格を帯びた秘密の指令書や軍事の秘密通達文書やニュースに至るまで探して熟達するまで研究する教えの人間もいた。

サイゴン、チョ・ロン地方についてだけ言えば、教えは多くの区域に分けた分かりやすい組織図を持っており、それぞれの区域には交代で見張りをする多くの人間が居た。特に外国の外交公館がある所では、毎日何人が出入りをし、何台の自動車が頻繁に行き来をしたのか、自動車の数やどこの国の人なのかを見張っていた。ある日その区域の中で、何事かが発生し、昼ごとに中央委員会 (Ban Trung U'ong) (マクマホン通り 4 番地) が良く知るために、報告書が届けられた。時勢に明るい人が多く、この件は次のように批評された。すなわち、フランス人はカオダイ教に精神的に封鎖された。それゆえ、日本がフランスをクーデターによって倒した時、その大部分の勝利は多くの道友が資料を手伝ったおかげである。」とある。カオダイ教徒は、日本の目となり耳となり情報活動を行い、軍事基地から行政文書、秘密の指令書から外交公館の監視までありとあらゆる事を見張ったために、「フランスはカオダイ教に精神的に封鎖された。」⁶⁹⁾と表現されたのである。この変化は日本軍のカオダイへの信頼と同時に依存を高めたものと思う。

(5) 軍人から政治家へ理解を求める幅を広げる

カオダイへの依存の高まりは、ますますエスカレートしていく中で、カオダイ教の代表教師チャン・クワン・ヴィンは、軍人だけではなく日本の政治家にカオダイ教への理解と復国への支持を広げる努力をした。すなわち、「力を尽くして努力し、生命・財産のすべてを犠牲にして、全国で動員したカオダイ教の仕事のおかげで、日本と協力しての事業は極めて誠実に行われ、当時の日本の各政界は皆カオダイ教の名前を知ることができ、カオダイ教を一番好きになった。この機会に従って、代表教師はまた一層外交手腕を我が物顔にひけらかし、東京から政治家がくる度毎に、氏は人に会う機会を持った。総領事や軍の大將が日本に帰る時はいつでも、ヴェトナム民族の願いを説明し、フランス軍の足枷の元に置かれている国内の

国民の苦しい状態を全て報告するために、送別会の宴席に出席をした。結局、日本の政界関係者と親しくなるごとに、代表教師はヴェトナム国の独立問題を運動するゆがせにできない機会を得た。

そのおかげで、カオダイ教の名声とチャン・クワン・ヴィンの名前は当時の国内各界で大変注意を引き褒め称えられた。』⁷⁰⁾とある。しかし、チャン・クワン・ヴィンの評価が高まってもそれがヴェトナムの独立には直結しない。

(6) 愛国分子の保護

復国を求めたのはカオダイ教だけではなく。多くの政党が独立を求めたが、フランス植民地政庁の弾圧は仮借ないものであった。カオダイ教だけが不十分ながらも日本憲兵隊の中途半端な保護下に置かれていた。それゆえ、「当時の国内政治党派は影響力のないものもいれば、組織が完全になっていないものもあり、フランス当局が過度に進攻すると耐えることができなかった。バンコクへ行く者やシンガポールへ行く人も居たが、国内に残るには日本の軍事機関の中に行方をくらまさねばならなかった。

ただ一人カオダイ教だけが公然と留まる所を知らずに進行していた⁷¹⁾。そのため、各党派はカオダイ教の影響力を頼みとした、カオダイ教が完全な組織となっていると分かり、各党派はこの境遇から別の境遇へ送り届けて支援するようたくさんの援助の要望書を起草した。東京におられる畿外侯の中央総本部 (Trung Ương Tổng Bộ của Đức Kỳ Ngoại Hầu) に送り届けて支援すると同じように、バンコク側では、ズウオン・ヴァン・ザオ (Dương Văn Giáo), カオ・ドゥク・チョン (Cao Đức Trọng), ダン・チュン・チュ (Đặng Trung Chử), 等々が養われ、シンガポール側では、チャン・チョン・キム (Trần Trọng Kim), ズウオン・バァ・チャック (Dương Bá Trạc), チャン・ヴァン・アン (Trần Văn Ân) 等々の保守的な方々がおられ、南圻の地にも北部や中部でのテロから逃れ

て南圻に來られた保守に心を配っていたゴォ・ディン・ズィエム (Ngô Đình Diệm), グゥエン・スゥアン・チュウ (Nguyễn Xuân Chừ) がおられた。とても小さな各党派の他にも、どのような党派もほとんどがカオダイ教を頼ってきた。すぐに夜会の組織に行き、国家のために役立てるお金を手に入れ、皆人を遣わして加わって、苦しみがなく安らくなるよう力を貸した。それだから、当時の世論は、カオダイ教は国内政治諸党派を養育するための乳母であるとした。』⁷²⁾とあり、カオダイ教がヴェトナム国内政治諸党派の錚々たる亡命者の保護養育に当たっていたことが知れ、その政治的な影響力を知ることができる。

(7) 日本政府の信任

日本の依存が高まれば高まるほど日本は情報収集や監視業務のみには満足せず、さらにカオダイ教徒の協力と言う名の利用を募らせる。ましてやヴィシー政権が1944年8月には倒れ、1944年10月にはレイテ島が米軍の再支配化に置かれると、日本軍はドゴール臨時政府によるフランス軍からの攻撃を予測せざるを得なくなった。それゆえ、現地の最大のパートナーであるカオダイ教を抱き込む必要があった。そのことは、カオダイ教から見ると自らのアイデンティティを確立する好機であり、実力を蓄える好機でもあると思われる。すなわち、「日本と協力して一つの事業を行う仕事を強く進めれば進めるほど、日本のためにする仕事が極めて多くなり、ますます心を尽くして支援することとなったが、決して給料や何らの報奨金も貰わなかった。ただ道義の名前のみで仕事をした。その時、日本の軍事諸機関にはそれぞれに大変多くのカオダイ教の人がいたり、正式に入隊したり、工兵の支援をしたりしていた。労働作業から行為の立ち居振る舞いにいたるまで皆道徳的で誠実で人に信頼される態度であったので、その結果教えの外の人とは全く区別が付けられるようになり、そのために日本はますます関心を寄せ、カオダイ教の人すべてを信頼するようになった。」

とあり、カオダイが情報収集や監視活動などだけでなく軍事機関等への人的な支援や労働作業の提供等に関わりを拡大し、信頼を得ていたことが知れる。ただ、「決して給料や何らの報奨金も貰わなかった。ただ道義の名前のみで仕事をした。」⁷³⁾との記事は、難波千鶴の「ファム・コン・タックと他の5人の指導者たちが逮捕され、プーロ・コンドール (Poulo Condor) 付近の地に、ついでマダガスカル島に送られた。このことが、カオダイ教を日本に急速に近づける事となった。重大な損失に耐え、生き残りを確実なものにするためにも、カオダイ教は日本の財政的な援助と保護を探し求めた。「法王」の放逐後の有力な指導者であるチャン・クワン・ヴィン (Trần Quang Vinh) は、日本の憲兵隊と重要な関係を結んだ。代わりに、カオダイ教は日本に、情報と造船場のための労働者と、信徒の青年たちを招集し日本軍を補佐するために募集することを見返りとして与えた。サイゴンでの造船場においては、働くものたちはそれぞれの省に応じてグループに組織され、1944年以降激化した同盟国の爆撃にもかかわらず、働くものたちの一方と他方とを競争させて省の名前をつけた木造船を作り出した。日本軍は、船一隻に200000ピアストルと3500000ピアストルの間の額を支払い、その金額はカオダイ教の活動のための極めて重要な収入を構成していた。」⁷⁴⁾との指摘に反する。もっとも、難波の指摘した金額はカオダイの教団に支払われたとするなら、給料や何らの報奨金もないということに矛盾はないものと思われる。

[注]

- 1) 高津 茂 (2006)「カオダイ教の日本への夢想 1934-1941」,『東洋大学アジア文化研究所 研究年報』第41号, p. 31 註 (31) 参照
- 2) 高津 茂 (2011-1)「二つの抗戦期に見るカオダイ教タイ・ニン聖座派と愛国諸派の民族的共生への動きの対比」『共生科学』第2巻, pp. 109-

高津 茂 (2010) 「チャン・ダオ・クワン (Trần Đạo Quang) とカオ・ダイ・ミン・チョン・ダオ (Cao Đài Minh Chơn Đạo) の形成過程」, 『東洋大学 アジア文化研究所 研究年報』第 45 号, pp. 100-116

高津 茂 (2011-2) 「グエン・ゴック・トゥオン (Nguyễn Ngọc Tường) とカオダイ・バン・チン・ダオ (Ban Chỉnh Đạo Cao Đài) の成立をめぐる」, 『東洋大学 アジア文化研究所 研究年報』第 46 号, pp. 136-151

高津 茂 (2012) 「カオダイ教伝教聖会の歴史と共生実践」『共生科学』第 3 巻, pp. 75-82

等を参照

3) 高津 茂 (2006), pp. 16-34.

4) 高津 茂 (2011-1) や高津 茂 (2010) におけるジオン・ブウオム戦線 (Mặt Trận Giồng Bướm) を参照

5) Tran My Van (2005): 'A Vietnamese Royal Exile In Japan, Prince Cuong De (1882-1951)', Routledge, London & New York, 2005

立川京一 (2000) 「第二次世界大戦期のベトナム独立運動と日本」『防衛研究所紀要』第 3 巻第 2 号 (2000 年 11 月), 67-88 頁

白石昌也・古田元夫「太平洋戦争期の日本の対インドシナ政策—その二つの特異性をめぐって—」『アジア研究』第 23 巻第 3 号, 1976 年 10 月, 4-7 頁。等々を参照

6) Sergei Blagov; 'Caodaism, Vietnamese Traditionalism and its Leap into Modernity'. Nova Science Publishers, Inc. New York, 2001

Jayne Susan Werner; 'Peasant Politics And Religious Sectarianism : Peasant And Priest In The Cao Dai In Viet Nam', Monograph Series No. 23, Yale University Southeast Asia Studies 等を参照

7) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997); 'Hồi Ký Trần Quang Vinh và Lịch Sử Quân Đội Cao Đài, Thánh Thất Vùng Hoa Thịnh Đốn, Tái Xuất Bản, 1977 によった。なお, 同書は <http://vietngu.caodai.net/index.php?view=article&catid=30%3Ao-s&id=311%3Ahi-k...> より原文を見ることができる。

8) ここでいう「教師」とはカオダイ教の位階の名称の一つ「Giao Su」の訳語であり, 普通名詞としての教員の意味ではない。「教師」は九重台の職色の品階の一つで, 教友 (Giáo Hữu) の上, 配師 (Phối Sư) の下の品階に当たる。その権能等については, 高津 茂 (1988) 『「法正伝注解」訳考 [2]—カオダイ教聖典の考察—』『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所「研究年報」』第 23 号, 1989 年 3 月, 63-65 頁

9) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997) p. 9

- 10) 「護法」もカオダイ教の宗教上の位階。詳しくは、高津 茂 (1985)「護法ファム・コン・タック小史試訳ーカオダイ教聖典の考察 (1)ー」『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所『研究年報』』第 20 号, 1985 年 3 月, 88-108 頁
- 11) Tran My-Van (2005):, p.143
- 12) 白石昌也 (2012)『日本をめざしたベトナムの英雄と皇子ーファン・ボイ・チャウとクォンデ』2012, 株式会社 彩流社 215 頁
- 13) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp.91-95
- 14) タイニン聖座は、カオダイ教の中央聖座であり、祖庭 (Tô Định) であり、いわゆる聖殿にあたる。タイニン市から東南の方向におよそ 4 km 隔たった現在のタイニン省ホア・タイン県北ロン・タイン社 (xã Long Thành Bắc, huyện Hòa Thành, tỉnh Tây Ninh) に位置する。1931 年に起工され 1947 年に完成を見ていることから 1942 年段階は工事中と考えられる。
- 15) 高津 茂 (2006): pp. 23-29 参照
- 16) 高津 茂 (2011-1): p. 111 参照
- 17) 職色 (Chức Sắc) は、教えの中で職分を有する者で、教友 (Giáo Hữu) 以上の品階にある者をいう。それゆえ、正式には礼生 (Lễ Sinh) は職色には当たらない。
- 18) 道友 (Đạo Hữu) は、九重台の 9 品階の最初の品階に当たる。カオダイ教に初めて入門した人は信徒と呼ばれ、道友の品にある。また、道友は、教えの中の友人である。
- 19) 教主 (Giáo Chủ) とは、宗教の創設者で主人である方を言う言葉で、カオダイ教の教宗 (Giáo Tông) も護法 (Hộ Pháp) もカオダイ教の教主とは言えない。強いて言えば、カオダイ教の創設を指示された至尊 (Chí Tôn) である玉皇上帝 (Ngọc Hoàng Thượng Đế) が教主に当たる。この至尊の権を二つに分け教宗と護法に与えたが、教宗レ・ヴァン・チュン (Lê Văn Trung) がなくなれたため、教宗李太白は諸般の情勢で護法ファム・コン・タックに教宗の権を委ねた。そこで、両権能を手にしたファム・コン・タックを教主と呼ぶ者がでた。
- 20) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 198
- 21) 正配師 (Chánh Phối Sư) は、配師の筆頭に位置する人で、九重台には 3 派、太 (Thái), 尚 (Thượng), 玉 (Ngọc) があり、それぞれに太正配師, 尚正配師, 玉正配師がいる。正配師はそれぞれの派の 12 人の配師の中から教宗により選ばれ、それぞれの派の他の 11 人の配師を掌握する。その権能については、高津 茂 (1986)『『法正伝注解』訳考 (1)ーカオダイ教聖典の考察ー』『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所「研究年

報』第21号, 1987年3月, 23-26頁参照

- 22) 協天台 (Hiệp Thiên Đài) は, 3 台すなわち八卦台 (Bát Quái Đài), 協天台と九重台 (Cửu Trùng Đài) の中の一つであり, 八卦台と九重台の中間に位置し, 上帝と人類の中間, 天と人の間の仕事をする。すなわち, 協天台は教えの司法機関 (cơ Quan Tư pháp) でもあり, 教えの律法に違反する者を取締り, 教えの座を確立し, 教えの律法を真に伝え, 護り管理する任務がある。
- 23) 律事 (Luật Sự) は, 法律の関する見習いで, 1936 年 7 月 11 日の色令 34 号 (SắcLinh so 34/SL) に従い, ファム護法によって作られた協天台の最も低い職色の品である。
- 24) 九重台 (Cửu Trùng Đài) は, 世俗に関わっていく中で教えを施行し, 普及していくための組織である。
- 25) 士載 (Sĩ Tài) は, 事務所で公文書を管理する人で, 十二時君 (Thập nhị Thờì Quân) の下で協天台職色の品階の一つで, 律事の上, 傳状 (Truyen Trang) 47 の品の下にある。また, 九重台の礼生と同じ品階に当たる。
- 26) キム・ビエン (Kim Biên) は, カンボジアのこと。
- 27) 開法 (Khai Pháp) は, 協天台十二時君 (Thập nhị Thờì Quân) の職色の品階の一つで, 護法の直接権の下に置かれた。
- 28) 九院 (Cửu Viện) は, 教えのほとんどの宗務を行う, 中央における専門的に行う 9 つの大きな機関をいう。すなわち, 太正配師が掌握する戸院 (Hộ Viện), 糧院 (Lương Viện), 工院 (Công Viện)。尚正配師が掌握する学院 (Học Viện), 医院 (Y Viện), 農院 (Nông Viện)。玉正配師が掌握する和院 (Hòa Viện), 吏院 (Lại Viện), 礼院 (Lễ Viện) の都合 9 院のことである。
- 29) 和院 (Hòa Viện) は, 九院の一つで, 玉正配師の権能の下に置かれ, 事務室の管理や書記の手伝いなどとともに, 職色間や信徒間や職色と信徒間の争いごとの和解もその仕事の内である。
- 30) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 199
- 31) 天封の諸位とは, 天の封じた位ということで, 具体的には教宗 (Giáo Tông) や掌法 (Chưởng Pháp) や頭師 (Đầu Sư) を指すと思われる。
- 32) トゥオン氏とはカオダイ・バン・チン・ダオ教宗グアエン・ゴック・トゥオン (Nguyễn Ngọc Tương) 氏のことであり, 同氏とカオダイ・バン・チン・ダオ・ベン・チェについては, 高津 茂 (2011-2) を参照。
- 33) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 200-201
- 34) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 122-
- 423 両大戦間期におけるカオダイ教と日本との関わり (上) 高津

- 123, 『チャン・クワン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh 「キム・ビエン (Kim Biên) における職色グループの活動」) には、「当時の教えは危険な状況のもとにあって、聖座に居られた高位の職色は正配師 (Chánh Phối Sư) トゥオン・チュ・タイン (Thượng Chủ Thanh) 師お一人であったが、師は危険で困難な様々なことを責任を持って背負う勇敢さには十分ではなかった。師は一人の信徒 (旧レ・サイン (Lê Sanh)) であるタム・サオ (Tám Sao) 氏のチョ・ロン (Chợ Lớn) にあった家に隠れていたのが見つけ出された。師は、ザオ・スウ トゥオン・ヴィン・タイン (Giáo Sư Thượng Vinh Thanh) と接触し、いずれの日か一緒にキム・ビエンに戻る約束をした。約束をした 1942 年 2 月 21 日に至り、トゥオン・ヴィン・タインは一台の自家用車で師をキム・ビエン浄室 (Thánh Thất Kim Biên) に危険を犯して送り届けた。」とあり、トゥオン・チュ・タイン師の潜伏先が、礼生タム・サオ氏のチョ・ロンにあった家と知れる。
- 35) グウエン・ゴック・トゥオン氏は、バン・チン・ダオ聖会において教宗に選出され、1935 年 5 月 9 日に登天礼に臨んでいる。
- 36) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 201
- 37) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 123, 『チャン・クワン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh) 「1942 年 3 月下旬に、次に述べる職色グループが教えを救う方途を探すためにキム・ビエン浄室に集まったが、良い考えを得ることはできなかった。そこに集まった方々は、カオ・ティエップ・ダオ (Cao Tiếp Đạo) 師、正配師トゥオン・チュ・タイン、ザオ・スウ トゥオン・トゥイ・タイン (Thượng Tuy Thanh), ザオ・スウ トゥオン・ヴィン・タイン、ザオ・フウ (Giáo Hữu) タイ・デン・タイン (Thái Đền Thanh), 2 位のレ・サイン (Lê Sanh) トゥオン・ティ・タイン (Thượng Tỷ Thanh) とゴック・ホアイ・タイン (Ngọc Hoai Thanh) の 7 名であった。」とある。
- 38) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 201-202
- 39) 高津 茂 (2006): 7 頁参照
- 40) 1943 年 7 月 30 日に行われた扶鸞から、「タイン・ソン」とは青山道士 (Thanh Sơn Đạo Sĩ) のことと分かる。
- 41) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 202
- 42) 白雲洞 (Bạch Vân Động) は、白雲という名前の洞で、各聖人が居り、洞主は青山道士である状呈 (Trạng Trình) グウエン・ビン・キエム (Nguyễn Bình Khiem) である。なお、ファム・コン・タックは青山道士に加えて、月心真人 (ビクトル・ユーゴ) (Nguyệt Tâm Chơn Nhơn

(Victor Hugo)), 孫山真人 (孫文) (Tôn Sơn Chơn Nhơn (Tôn Văn)) を含めて解釈し、博愛・公平の理念が息づく象徴的な場所としている。

- 43) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 202
- 44) この扶鸞の内容は、Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 174-179 に記録されている。
- 45) 礼生ゴック・ホアイ・タインは、優秀な靈媒であったようで、付表のように 1942 年 10 月から 1945 年 4 月までの 19 回の扶鸞のなかで、礼生ゴック・ホアイ・タインが扶鸞の当事者としてとなっているのは 11 回に及んでいる。「聖なる教えが諭され、良い兆しを得るであろう」とは扶鸞による神意が礼生ゴック・ホアイ・タイン氏によって示されるであろうと言うことを示唆していると解される。
- 46) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997) 『チャン・クワン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh): p. 124 参照。
なお、教友タイ・デン・タンと礼生ゴック・ホアイ・タインが扶鸞を行ったのは付表では、1942 年に 3 回、1943 年に 2 回見られる。教友タイ・デン・タイン個人では 1944 年 8 月までの 13 回のすべての扶鸞に参加している。
- 47) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997) 『チャン・クワン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh): p. 124 には「教師トゥオン・ヴィン・タインが日本と協力して仕事をして教えを領導する役割を受領すべきであるとの決定を教え降した。」とあり、具体的な日本との協力で踏み切る意思決定が教団内でなされ、その責任を教師トゥオン・ヴィン・タインに授与することが神意として示された。
- 48) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 203
- 49) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997) 『チャン・クワン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh): p. 132,
- 50) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997) 『チャン・クワン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh): p. 129 に 1942 年 11 月 18 日、通訳ルウオン・ヴァン・トゥオン (Lương Văn Tương) の仲介で、チャン・ヴァン・クワン氏が木村・望月という名の日本の士官とあったことに関する記事があり、もしカオダイ教が協力で踏み切るのであればその利益は計り知れないが、具体的にどのような仕事をするのか、日本兵はどのようにカオダイ教を保障していくのか、文書での確認についての議論になると、日本の参謀部との協議が必要との事で、二士官の発言は個人的な発言を超えるものではなかった。
- 51) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 204-205

- 52) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997) 『チャン・クアン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh): p. 131
- 53) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 205
- 54) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997) 『チャン・クアン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh): pp. 138-143
- 55) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997) 『チャン・クアン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh): p. 129
- 56) 付表の整理番号3の報恩堂における扶鸞がこれに当たる。Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997) 『チャン・クアン・ヴィン回想録』(Hồi Ký Trần Quang Vinh): pp. 143-147
- 57) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 206-207
- 58) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 207-208
- 59) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 208
- 60) 立川京一(2000): 75-77 頁, 牧久(2012) 『「安南王国」の夢 ベトナム独立を支援した日本人』, 2012年2月, 株式会社ウェッジ, 参照
- 61) 北野典夫「天草海外発展史」, 天草市立中央図書館所蔵の『週刊みくに』昭和56年9月18日号
- 62) Chizuru Namba: Francais et Japonais en Indochine (1940-1945) Colonisation, propagande et rivalite culturelle, Editions Karthala, 22-24, boulevard Arago 75013 Paris, juillet 2012, p. 106
- 63) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 208-210
- 64) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 210-211
- 65) Tran My Van (2005): pp. 167-168
- 66) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 211
- 67) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 212
- 68) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 212-214
- 69) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 214-215
- 70) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): pp. 215-216
- 71) 1943年2月には、カオダイ教のタイニン復帰とサイゴン進出が実現している。

Philippe Devillers : 'Histoire du Viet-nam de 1940 a 1952', Paris
Seuil, 1952, pp 90-92

- 72) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 216
- 73) Đại Đạo Tam Kỳ Phổ Độ, Tòa Thánh Tây Ninh (1997): p. 217
- 74) Chizuru Namba (2012): p. 106, 立川京一 (2000): 81 頁